

---

# 愛し方

越華

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛し方

### 【Nコード】

N2617A

### 【作者名】

越華

### 【あらすじ】

ゲイの店を経営している27歳の野田秀時は、ある事で女性に対して恐怖感を持ち女性に対して普通に接することが出来なくなり、ゲイの道に入った。彼の寂しさを埋めてくれるのは、生まれる前から家族同士付き合いの有った家の独り娘の優だけであった。親から離れて隣同士で暮らすうちに優は自分に目覚め始め人生を考えるようになった。彼から逃げない事が自分も救われる事だと考え、彼がどうしてゲイに入ったか解った時、自分への彼の愛が凄まじい事が解り、自分の彼への愛を疑い悩む。その結果自分の愛の強さに気づ



## 愛し方 第1話（となり）

深夜隣の住人が帰って来ました。

鍵を開ける音、ドアを最後まで持つて閉めないから、「ドーン」という音が響く。

この音達をするのが、午前2時過ぎ。

それから数を5まで数えると壁を叩く音。

叩く音も「コン・コン」2度続けて、1回たたくパターン・続けて2回たたくパターン・3回たたくパターンそれぞれ意味がある。

「コン・コン」3回鳴ったら私はベッドから急いで出て、冷蔵庫に用意してある冷えたおしぼり2本と、冷えた水を持ち下駄箱の上のトレーの中から、キーを手に取りながら、ツツカケを履き、大急ぎで外に出てドアに鍵をかけ隣の「コン・コン」の部屋へなだれ込む。風呂場へ行き、洗面器を持ち出し、ナイロンの袋を入れ開き、壁側のベッドで苦しんでいる女の顔をナイロンの袋に近づけ、洗面器を持たせると首におしぼりをのせてやる。

吐いたときは水で口を濯がせ。

後は服を脱がし、寝巻きを着せ、布団をかぶせて、そつと鍵をかけて帰る。

部屋に帰ると眠気も覚めてしまつて、もう1度寝るのに苦しむ。

3回の時は、殆ど意識が無く私独り用事をして、終えることが出来るので楽。

2回の時には、泥酔ではなく、酔っているとゆうぐらいで意識は有り、口はきける。

しかし、正気と夢うつつの状態の為服を脱がせ、寝巻きに着せ替え、それからである、顔のマッサージをしなければならない。

もちろん化粧を落としてあげた後だから、時間がかかる。

1回の時は何もしない。

しないがその他がある、話し相手だ。

これは彼女の仕事の休みの前日が多い、一番私がなごむ時であり、幸せな時でもある。

彼女は、身長174センチ、体重は量らない、その辺のモデルなみの顔をしている。

一緒に歩くと目立つので並んで歩かない。

秋の涼やかな気持ち良い今宵は、3回壁を叩かれた。

「今日は、イヤ！」と声をあげたが部屋の中は私独り、誰かが代わりに行ってくれるはずもなく、体を起こした。

寝巻きを着せ終わった頃、寝ている彼女の目から涙が、こめかみを伝って流れ落ちていた、綺麗だと思うのと切なく、悲しく、かさぶたの心の傷から血が滲んできた。

「これで、何回目やろう」両目をいとおしく拭く。

前にしつこく喧嘩越しに聞いた事が有り、話を聞く事で、相手をよけい傷つけてしまった事があった。

その時の彼は抑揚の無い、感情の無い言葉で話してくれた。

店の客に、店の子が侮辱され、拳句の果てに土下座して事を収めたと言う。

私は、土下座、という事に衝撃を受け、私はそうして得たお金で暮らしている。

一人部屋で泣いた。

そんな私は傍で何も出来ないから、せめて呼ばれた時は出来るだけ速く行く事が、私の出来ることだと思っている。

でも、時々苦しくなる。

「おやすみ」と言って布団を掛けようとしたら、ゆっくりと目が開いた。

「お帰り！ お水いる？」と聞くと、返事の変わりに右側に体をずらし、ベッドの壁側を空けた。

「寝巻きが無いから」と答えると、上を向いたまま、ベッドの下の引き出しから、丈の長いティシャツを差し出た。

薄い黄色、肌の色が何と無く見えそうな色だ。

おでこの辺りに感触を感じて目が覚め、「ハー、やっぱりだ」今の状態が頭に浮かぶ。

彼女から彼に変わって、私の横で寝ている。

彼の左腕で腕枕、私の背中に彼の右腕、おでこの上は綺麗な顎が。完全に抱き寄せられた状態で寝ていた。

目を閉じて反対側に寝返りを打つと、右手がみぞおち辺りに来て、グツと引き寄せられた。

目を開けないでいたら、「た・ぬ・き」と耳元で囁かれ、それでもジツしていると、背中が温かく成りだんだんと意識が遠のいて、寝てしまった。

耳元で「コーヒー飲む？」と言う優しい声に、とっさに反応して「うん」と言ったが、また眠ってしまった。

目が開くと、枕にうつぶせで寝ていた。

ベッド横にあるイスの背に水色のブラジャーが、掛けてあるのが見えた。

（ウソヤロ！）「ブラジャーをして寝ると、健康に悪い！」と言って、服を脱がさずに腕の所から、引っ張り出して取ってしまう。前にもやられた。

「あー・・・、もう！」と言いながら隣の枕の下に顔を突っ込むと、愛しい人の匂いがした。

枕が少し上がり、笑った目が覗き込んで、

「朝飯にしよう」

「わかった！」起きたいが起きると、胸の形が判ってしまう。

顔だけ出すと、彼が足元に座ってコーヒーを飲んでいた。

「何してんの？」（何でそこにいてるわけ？）

「人が寝てるのを見ると、安らかな気持ちになるな。昔、誰かさんのを3時間ぐらい、見つとたときがあっただけ。寝相が元気で、なかなかのもんやったナ」

「誰の・・・えっ！　いつ、そんな事が有ったっん？。」（ホンナわけないは、絶対に）

「俺が受験勉強してる時。家より落ち着くんで、お前の部屋よう借りとったやろ？」（なんか口元が笑った。なんか知らない事がある。なんやろ、なんなんよ！）頭の中が無駄にくるくる動いた。

「それは、私が学校へ行つて、居ないときでしょう。・・・エッ！待つて、さつき3時間て言つたよね。」

疑問だけが口を突いて出てくる。混乱した。

「それって夜？ イヤ夜とかは無いよね？」

「うそ！あつたんだ」親は何しとつたん。何を考えてんねんな。

彼は、私の言う事に一々頭を縦に振つて、知っている者の余裕を漂わせて答えている。

「クラブ活動で疲れ切つたのか、8時ごろに行つた時も寝てた。夏はクーラーが利いてはかどった。覚えてへんか？・・・ブラウスに、アイロンがかかつてたり、冬の制服にハーブの匂いがしてたり。あれみんな俺がしたんやで、脱いだ服をハンガーに掛けたのもナ。」前は、私は寝ると少しぐらいの音では起きなかった。

「でもほとんどは母さんがしてたんでしょ？・・・冗談やろ？」

本当は、何回かでしょう？・・・アッ！」頭の中で弾ける音がした。

母さんは、私の部屋を掃除してくれた事など無かった。

ある時期数ヶ月だけは良くしてくれた、不思議だっただけ嬉しかった。

机の上に時々おやつも有った。

「もう今日は、立ち上がれへん！絶対あかんわ」私の知らない所で何かがあつたなんて。

「おばさん俺の事信用というか、お前を任せてくれてたんやな、だから勉強もお前の事も、ガンバッテ出来た。いつ来ようが、いつ帰ろうが勝手にさせてくれたし。でも、さすがにお前の下着は、させてくれへんかったな。安心したやろ？」下を向いてニヤついている、まだ何かある。

「本当に？そのニヤつきはなに？」胸の形が判ろうがどうでもよくなつて、ベッドに座つて聞いていた。

「本間や、そこまでさせては申し訳ないで、叔母さん言うつつた。」  
この人には髪の毛が跳ねていようが、肌が見えようが関係ない、私その者を見てくれている。

可笑しくて声を出して笑ってしまった。

愛されている人間の豊かな笑い声だと、自分の笑い声を思った。

彼も微笑みながら立ち上がった、そばに來ると私にコップを持たせ、水色のセーターを脱いで掛けてくれた。

白いシャツが目にしみ、コップを渡そうとすると抱きしめられ、彼の体温が伝わって來た。

この後どうなるのかドキドキしたが、コップを持った手を首に回して、私も彼を抱いた。

彼の体がビクツ！としたが、心を乱してくれたお返しに、より強く抱いた。

「ごめん。」小さい声でやっぱり言った。

ムカツクからさつきよりもっと強く抱いてやった。

「ふう・・・意地になってへんか？ 苦しい、参りました！」手を離してやった。

「フン！よわっちいの」私の心は冷えて固まった。

「あんなに強く、抱きしめられるんやから、これから強く抱きしめても大丈夫やな。」

「エッ！どう言う事？」二人で冗談のような会話で、心を隠しあう。心のジェットコースタ。

彼は愛してくれているけど、これ以上は絶対に前へ進めない。

週刊誌で見たけど女装する男の人に、付いている女の人を『おこげ』というそうだ。

彼には聞かせたくない言葉だ、笑いにする様な者ではないとキツト落ち込むと思う。

私がベッドを直し、コーヒーを飲み干して振り向くと。

彼は私の存在を忘れている様に寝巻きに替えて、今綺麗にしたベッドに、平気で入って寝ようとしている。



彼の夕方の出勤時間まで、話をしていたのに。

「モウ！・・・帰ろう！」服を抱えて、隣との境目の板を外した、ベランダのほうへ帰ろうとしたら、せつなく、どこかおどけた声で、「今日は、独りで居たくないナ」その声を聞くと、すぐに服をイスに置き、弱い私は目覚まし時計を手にとって、

「何時？」と聞くと、

「4時間ある」時計をセットして、ベッドの壁側に入り、彼の手を握り目をつぶって、寝る用意に入った。

「神様、私は、又、負けてしまいました」彼の押し殺した笑い声で、私も笑みを浮かべながら、何か話そうと考えていたが、1分もしない間に眠くなり、彼が腕枕をしようと動いているのは判るが、目を開けられない。

脳が寝てしまっているの、抱き寄せられている事も、何か遠くで起こっているように思え、意識は遠のいていった。

意識が遠のく前に、ハッキリしないが、おでこ・鼻・くちびると順番に温かいものが、触れていったような感触がしたが、起きた時は寝る前よりも、もっとリアルな感じで蘇た。

あれは唇か？ 私の思い違いなのか、でも感触が確かにあった。

そうだったらどんなに嬉しいか。

彼が、女から少しづつでも、男に移っていつてくれれば、心配している人達がどんなに喜ぶ事か。

いつも男ではない、それは、彼にとっては苦しみで、両方の心を持つたまま、生活するのがどういう事か、私には悔しいけど良く解らない。

その事で、二人の将来を楽しみにしていた、親達も悩み苦しんだ。彼が車ごと海へダイブをした時、私は、自分しか彼を救う事が出来ないなんて、酷い錯覚をして、両親に心配をかけ、彼の両親に、辛い希望を持たせた。

何よりも彼を無視して、自分の感情で彼に付きまとい、いつも一緒にいようとした。

周りから二人が付き合っているように、彼がノーマルに見えるようにした。

そして、彼にはこの事が、どれほど辛いことか、彼にいわれるまで気が付かなかった。

彼に、離れるように言われたが、彼が私の顔を見るのが嫌になるまでと、言う条件で許してもらった。

このマンションに越して来る頃には、二人の、周りの人には分からない、世界が出来ていた。

彼が店で働くために、親元から離れることを聞いて、「私を置いていくんだったら、それでも良い。」

私も家を出る。誰も知らない東京へ行って、いい加減な生き方をして、自分の人生を壊す。」

と、本気で脅した。

引越す前に幼馴染の両家の親を集めて、親達に彼が「偏見は自分が受けるから、そして、結婚を望むなら結婚をします、子供が欲しいのなら作ります。ですから、彼女を僕の傍に置かせてください。」

泣きながら、いつ家出するか判らない私を、押し止めるように親達の了解を取った。

午後3時、目覚ましが鳴る前に時計を止め、これから変わって行く彼の顔に、お別れをする様にながめ、お互いの体温で温まったベッドを抜け出して、彼を起こす。

起きた瞬間から、夜のプロの女の顔に成る。

もう私の存在はこの部屋からは、無くなっている。

私が居てはいけない空間。

シャワーを浴びている間にそっと帰る。

部屋に帰ると自分の気持ちを消す為に、ベッドに飛び込む。

隣では別の時間が流れている。

私の存在しない時間。

前は、気持は落ち着いているのに、たまに涙だけが流れる時があった。

電話が鳴り「行くよ！」の声。

「いつてらしゃい！」声は明るく出るが、言葉に心が付いて行かない。

彼女の働きで生活をし、彼の愛で生きている。

時々私の人生は、私という人間はどうなっているのか、不安でじつとしていられなくなる。

彼にとって良き人が、見つかり幸せになってくれれば、私も人生を生きていける。

でも、彼の存在を消すことが出来ず、私の愛は湖の底に沈んでいる。2人きりの生活でいろんな思いが、重く耐えられ無くなり、私だけの時間を持ちたくて、昼間働きたいと相談すると、一言「だめ！」夜カルチャーセンターに行きたいと言うと、危ないから「だめ！」辛かったけど部屋へ行かないで反抗し、五日目に折れてくれた。

カルチャーセンターは昼間行き、バイトは、条件としてカルチャーセンターのある週2日間のみで、夜7時までには帰るという事で許可が出た。

今では楽しくて、内緒でバイトの喫茶店へ週五日行っている。

店の休みと、彼の休みの日以外行っている。

時間は店の好意で、だいたい夜7時半ぐらいから11時半ぐらいまでしてもらい、彼の完全に居ない時間帯にもらった。

バイト先は24時間開店している店で、彼の店とは逆方向。

遅く成ったときはタクシーで飛んで帰り、今の所バレてない。

少し怖いけどこの楽しさをやめたくない。

カルチャーセンターでは日本画を習っている、この頃面白くなってきて、これもまた楽しくて休んだことが無い。

終わった後皆でお茶するのが楽しくて、彼の知らない世界を持つ事で、構ってくれない、彼への仕返しのような気持になるのはどうしてか、私、近頃反抗期の様だ。

今日も電話で見送った後、急いで用意をして店に行く。

店に出ると、勤め帰りの人達で半分の座席が埋まり、店に出ると背

筋がシャンとする。

ここが私にとつての、世の中であり自分独りで生きる社会だ。10時を過ぎた頃から客層が変わって、夜の仕事の人達で、一層店は活気づく。

私の知らなかった世界と場所、その空間に居るとなんだかワクワクしてくる、華やかで現実的で、それなりのオオラを持っている人が沢山居て、体の中から何かが湧き出ている様に見える。

彼も外では、ここに居る人達のように、オオラが出ているのだろう見て見たい気が何度もしたけど、綺麗な顔の彼女を見ると、劣等感で一杯に成ってしまうので怖くて行けない。

本当の理由は、彼女を認めたくないから認めると私の存在が無くなる。

今日は11時半を過ぎてしまい又、こんな日に限ってタクシーが捕まらない。

帰ったら12時を過ぎていた。

ベランダに行つて隣を見てみると、真っ暗でほっとしたが寂しさが、また生まれた。

今夜は月夜。

カーテンを開け放して、コーヒーを飲みながら月見をしていると、何か香りが欲しくなつて、アロマの5時間持つと言われた、青い口ウソクを3本部屋のあちら、こちらと、点けておいてみた。

幻想的で香りに酔い、ほのかな灯りにひたると、(世の中すべての人が、幸せであれ)という気持ちになる。

白いお月様とお酒が飲みたくなり、コンビ二に勇気を出して急いで行くことにした。

帰つて来て、ベランダから隣を覗くと部屋は暗く、まだ帰ってきていなかった。

酒のあては、貝の缶詰、出し巻き卵、漬物セット。

心が開け放たれ幸せで寂しく酔った。

「この苦しみ、あなたは解りますか？」独り言を言って、ビンを空

にし「親が見たらきつと泣くな」せつない独り言。

「一人で遠くへ行きたい、こんな暮らし嫌だ。よし！お給料もらったら旅に出よう。そうしよう。このまま床で寝るのもまた、いいもんだ。誰かさんの様に介抱してくれる人が居ないのも、かえって楽私一人。」酔って真っ直ぐ歩けなかったけど、誰も入って来れない様にロック・チェーンをして、冷蔵庫のビール2缶を飲み干して、床に横になった。

子供でもなく、妻でもなく、友達でもなく、知り合いでもなく、単なるお隣さんでもなく、女の人を受入れられないから恋人でもない。涙が耳から床に落ちていく。

「何を私は、ウジウジしているのだろう、今日の私は変！」

肩の痛みで目が覚め、痛みですぐに動けないのでじっとしているとベランダ越しの空が朝焼けで美しく、昨夜に続いて自然の美しさが今の曇っている私には有り難い。

カルチャーセンターの用意をして、ドキドキしながら電話を見るとメッセージが入っていた「ただいま」不機嫌な声、録音時間は4時になっていた。

「私の事が心配じゃないの？返事が無ければ普通心配するよ。」独り言を言い、急いで見付からないうちに部屋を出た。

彼の部屋の前を通る時はドアが開くのではないかと怖かった。

バイトが終わって、家のゴミを捨てに行く途中廊下を歩いていると綺麗な彼女が、無表情で通り過ぎて行った。

いつもドアが閉まる時に音がするのにドアが音も無く閉まった。

私は固まったままで後ろを見ることが出来ない。まだ11時過ぎ（何で今頃？それも完全にシラフで。部屋に帰りたくない逃げよう！）

とにかくバイト先へ逃げた。

誰かの家に泊めてもらうつもりで行ったが、バイト先の親しい人達は帰った後で誰も居ない。

マスターと会ったので変な電話や、「不信な人が家のそばに居るの

で」と嘘を言つて、ホテル代を借りようとしたが、明日まで帰らないので、自分の部屋を使うように言われ、断ればマスターを信用して無い様で、泊まらせてもらうことにした。

部屋はかたづいていて、綺麗に整理され「男の部屋」という感じがする。

ベッドのシーツを変えるように言われていたが、お世話になるのに新しいシーツを使うのは、申し訳なくそのまま使う事にした、枕はタオルをひいて、服のままベッドに入ったら、彼とは違う匂いがしている。

いい匂いだが化粧水が違うのか甘い匂いだ。すぐに意識が遠のき遠くで声がしている。

マスターが朝帰ってきて困ると思い、チェーンはしなかった。

重い意識の中で、帰ってきたから起きようと思いつつ目が開かない。声は二人のようで、「恋敵」「仕返し」「もったいない」と聞こえ、もう一人「いや、いい」この声は彼に似ている。

「おきて」声がして目を開けると彼が居た。

「なんで？」頭の中が寝起きのせいか、真っ白になって止まった。

マスターの顔を見ると「泊まって貰って良かったんやけど。お迎えが来てしもうたから」とニッコリ笑い。

その横の人は、事務的にマスターに

「お世話に成りました。行くぞ」と私の顔も見ないで言い、先に玄関の方へ行つた。

マスターの方へお辞儀をして「こういう事が解らないけど、有難う御座いました。」

マスターも「ごめんね！」気の毒がり、

「いえ、それでは店で、それとシーツ変えないで寝ました、朝シーツを変えよおもつて、私の匂いが付いてたら申し訳ないので、変えてください。」

「君の匂いのなかで寝るのも良いかもナ」

私が笑うと、マスターの顔が引きつっていた。

玄関に居る人が、怒った顔でこっちを見ているのが解った。

私は後ろに居る人をまったく無視して

「マスターの匂い好きです。とっても安らいでよく眠れました」マスターは苦笑いし、後ろに居る人に手を振った。

なんで？知り合いか？彼の表情がおかしい。

助手席に載るのが好きだったが、最近乗ることも無くなっていた。

外はまだ暗い、何時だろう新聞配達の人が走っていたから、3時は過ぎている。

夜明けまでは時間が有りそうだが、この前の様な朝焼けが出て欲しいな。

ずっと外を見ていたが、家に着くのに時間が掛かっているのに気がつき、周りの景色を見てみると、やっぱり違う一時間は走っている彼の横顔を見ると前より表情が穏やかに成って来た。

（私の反乱で、パニックテンだらうな、心が痛いけど、でも私は謝らない絶対に。）

やっとマンションの前に着き、先に部屋へ行こうとドアを開けたら「車入れてくるから、そこで待つといて！」　　ウツ！逃げれない。

穏かな朝だと言うのに、これから修羅場です。

大きく息を吸いゆっくり吐いた、2度した頃に戻って来て、前を歩いて行く。

私は、さっきの決意とは逆に後悔で一杯になり、何に対して後悔しているのか、彼に何を誤るのか、どう言ったら良いのか、解らなくなっていた。

エレベータに乗ると、薄っすらと良い匂いが私からしているのに気がつき、そつと襟を立て匂いをかぐ、マスターの匂いだった。

急いで上着のファスナーを閉め、襟を立てて、顎で蓋をする様に、上着の中へ顔をうずめた。

彼の部屋の前を通り抜けようとしたら

「お前の部屋に、頼むから他人の匂いを入れんどいて。」体が止まり。罪悪感が広まった。

部屋の中へ引きずり込まれると、真っ直ぐ風呂場へ連れて行かれ、とにかくその場を逃げたくて、

「着替えないし、着替えとって来る」

無表情ですかさず「俺が取ってくる。先にシャワーしとって」

「でも、どこにあるんか知らんやろ？」

「しってる！」大きな強い声で言い切られた。

（あっそ！あんたは、なんでもしってんねんな！）上から落ちてくるお湯の中で、無性に腹が立った。

シャンプーや石鹸は彼の匂いのする物、部屋に帰ったら洗い直すつもりで、彼のシャンプーや石鹸を、いつもよりたっぷり使い、出ると、下着とティシャツ・部屋着用のズボンが置いてあった。

「私の何が解っているのよ、私の心と、下着や服は一緒じゃない」つぶやき。

怒りが湧き大声でわめき出しそうになるのを、こぶしを強く握る事でこらえ、頭にバスタオルをかぶって、彼の座っているソファに座った。

差し出された水を飲み干すと、急に悲しくなつて涙がポタポタと落ち（泣くな、泣くな）何度も自分に命令するのに涙は落ち、今までの悲しい、辛い、悔しい気持ち止められない、閉じた口から泣き声は嗚咽となつて出て（バスタオルをかぶってるから、見えないから）頭の隅でそう言っている自分がいた。

彼は動かずにじっとしていたが、次第にいろんな彼の悲しみが、わがままな私に伝わってくる。

洗面所で顔を洗って、髪をドライヤーで乾かしていると、自分の居場所が何となく解つて来た。

結論を出すのが怖いし、頭の中も整理されていない、寂しいからだけでは無い。

（お腹がすいた）「ああ！お腹がすいた、腹減った」オーバーに声を張り上げると。

ドアが開いて、「う・る・さ・い。野菜サンドやで・・・」「紅茶ネ」



お互い引きつった、笑顔の会話が交わされ、引きつった笑顔の中から、私の帰りを待ちながら、サンドを作る姿が浮かび出てきた。食べている時は、下を見たまま顔を上げないで急いで食べ、逃げるようにソファに向かった。

ソファで眠気を我慢していると、後片付けを済ませた彼が横に座った。

（イヨイヨやな）肩を抱き寄せられたので、頭を彼の肩に載せると落ち着き、素直に「ごめんなさい」が言える気がして来た。

しばらくの沈黙の後、彼の体が少し揺れ手で顔を拭いている、泣いている。

私も又涙が出てきた。（この人と、別れたほうがこの人の為に、成るとちがうやろか？今まで勝手な思い込みで、この人の為と思っていたけど、自分の為やった離れたくないから。私の気持ちで、この人を振り回したらあかんナ）

「ごめん。心配や嫌な思いさせて。」素直にそれだけは言えた。

少し間が空いて彼は洗面所へ顔を洗いに行った。

（言い出すのは私から、今だったら私から言える、彼から言われてすがり付く様な事はしたくない）

「ごめん」横に座りながら言われた。

「何が？」判っている深い意味を持たない言葉だと言うことを、でもきっかけにした。

「話しせへん？」

「いいよ」いつもの優しい眼差し、心が揺れた。

「私達、少し離れてみいひん？」

「離れるゆって、どうゆうこと？」

「お互い違う所で生活するゆうこと。」

「ぼくから、離れるゆうことか？」

「自分の生活の基盤がちゃんとあって、お互い時間があれば会うゆうこと」

「ほな、俺が時間が無いゆうたら、お前は会いにこうへんねんな、

俺に会いたくても」揺れた。

「時間がないんやったら、仕方ないね」笑みを浮かべて顔を上げると、彼の顔色が変わっていた。

体全体から怒りが込み上げ、それを何とか抑えている。

「ごめん、ちよとシャワー浴びてくる」揺れた。

彼の下着と部屋着を出し、涙をこらえ風呂場の前で、

「着替えおいとくから」言い終わった瞬間、風呂場から手を引っ張られ、シャワーの中で抱きしめられた。

「本間に離れるんか、なあ！俺もお前みたいに考えて、離れようと思った事があった。離れられへんかった、そやから海へ飛び込んだや。」

男の時も、女の時もお前がいつも俺の中にいるんや。」「良く解っていた、でも言わんとあかん。

「だから、離れるの！」今度はもつと彼を傷つける。

私も生きて行けなくなる。

（素肌にシーツや布団の肌触りが、こんなに気持ち良いなんて知らなかった。）

2度目の強引なシャワーで又、下着が要るようになって、ベッドに入って待っていたら、彼が、ベランダから私の下着を持ってユツクリ歩いて来た。

「ピンクか、白か、迷って、遅くなりました！」喧嘩越しの笑いを浮かべて、丁寧と言う。

「10分も迷うか？第一私が、はく下着やで何で迷うわけ！」

こっちも、ニツコリ笑い返す。

ベッドの足下に座り、背中を向け下着をよこさない。

「すいません下さい」丁寧をお願いすると、下着を座っていた所に置いて、

「コーヒー入れよう！」台所のほうへ行ってしまった。

（この野郎、何にも着けてないのを知ってて、そう出るか！）

ベッドに潜り込み顔を出して見たら、あった下着が無く、ニツコリ

笑っている彼がいた。

（何かされる）

とつさにシーツの端を掴み、布団が浮き、そのとたん反射的にシーツの上を転がった。

「オー！」 歓声をあげている。

「いいかげんにしてよね！」 本当に腹が立った。

ニヤ着いた顔で「復讐、苦しめたバツ！」

「もういい！」 シーツを巻いたまま部屋へ帰ろうと歩いたが、シーツがきつく巻きついた為に、歩きにくい（エーイ！）腹立ち紛れにシーツを取った。

「コラ、止めて！」 彼の叫び声がして、ベランダの戸に私の手が掛かる前に、私はシーツに包まれた。

「ごめん、もうせえへん、頼むわ」 後ろから巻かれた手は、大きかったが、声は優しく、いつもの様に落ち着いていた。

心は大きく揺れた。

兄が来てくれた。

優しい「安ボン」が私の引越しの為に。

「安ボン」にとって、彼は男友達にうつるのか、どうなんだろうが、冷やかし半分に「そこのお似合いのお二人さん、チャラチャラせんと、速よ梱包しておくれ！」 2人はまったく動じない。

ビール片手に、語らいながら梱包を続けていた。

後ろに気配がし振り向くと、兄が青いナイロンの袋を差し出して、「こんな物まだもつとたんか。ほかすか？」 外からでも中に白い布が入っているのが解る。

胃の底が緊張し、体全体に汗がにじみ出るような、感觸と共に（どないしょ。見られたらどないしょ。）

「ほかしといて」いつもの様な調子で言ったつもりだが、2人の方へ顔を向ける事が出来ない。

カラカラの口にコーヒーを含み、飲み込もうとした時に、コーヒーが喉を通る音と、ナイロンの音が、同時に聞こえ反射的に顔を上げ

ると、彼が青いナイロンの袋に手を入れていた。

「出したらあかん！」叫ぶ。（神様！）

「あかんで？ブラウスに血が付いてるやん。どないしたん？これ」  
袋からブラウスは出ていた。

兄はブラウスを見て私に「どうするのや？」「言うのか？」と目で聞いて来る、そうゆう兄を見て一気に落ち着き彼に、私達家族が黙っていた事を話す事にした。

「安ボン、どつから話したらええ？」聞くと、近くのダンボールを脇へ寄せブラウスを広げて、

彼の側で「このブラウスの血は優ので、あの時、部屋に入ったらベッドで苦しんで。もうビックリして、親を呼んで病院へ連れって行った、夜7時位かな、相手を警察へ届けることにしたんやけど、優が嫌やゆうから、届けは出さへんかった。傷も残らへんゆうし」

「何でそんな事になったんや！」驚きのせい口調が強い。

自分が原因と知ったら・・・

私が話す事にした「どんな風に話して良いかわからへんから、有りのままに出来るだけ、感情を入れないで話すわ、安ボンに言って無い事も、あると思うけど、1年生の時、放課後3年生の女子に呼ばれてん。時チャンのクラスの子。」眉間に縦じわが入った、もう話の半分は解ったと思う。

「時チャンのクラスに入ったら、時チャンの席に座らされて、髪の毛綺麗な人が、時チャンに会うな、他の人も、2人は上手くいつているから、私に邪魔をするなって。時チャンとは、別に何でも無かったから、そこで解りました。言うとけばよかったんやけど、理不尽さに腹が立って。小さい時から私達は、将来一緒に暮らすと思って、両方の家族もそのつもりで付き合っています。もし、時チャンが、他の女の人と付き合ってるんだったら、おばさんやおじさんから時チャンに、別れるように言ってもらいます。お名前は何というのですか？どなたですか？と、言うてしもてん。ごめん。

それから、時チャンの机の上に腹ばいにされて、長い髪の人バン

ドで背中を何度か叩いた。その人と後どうなったんか知らんけど、それが原因で別れたんやったら御免ネ」笑顔を交えて話した。

「ごめんな、そんな事何にも知らん。傷つけてしもって俺は・・・」

彼を助けるように、大きな声で兄が

「髪の毛の長い、お前と一緒に居た子といえば、吉川茜やな？時そやろ！優は、誰がしたか言わなかったけど、これで解った吉川に一言でも言わんと、腹の虫がおさまらへんわ！」

ブラウスを見ていた彼の心は今どんなだろう？

運送屋が行った後、彼は何時もの様に仕事に出かけ、新しい部屋を兄と片付けて、家の周りを散策

しながら兄に、心の中を見て欲しくなつて、

「なんで引越すことになつたか、ゆうてもええ？」

「ハードな人生送ってるからな・・・あいつの親心配してたけど、うちの親はちよつと安心してた。」

23歳やったらまだやり直し出来るゆうて、あいつには悪いけど正直ゆうて、俺もこのまま自然に終わってくれへんかな、と思わんことも無いねんで、男の26歳はまだまだや、これからや。」

鼻の奥がツーンとして目が熱くなつて、涙をこらえるのに唇を噛み、こらえ無言で歩いていると、

「重たくなつてん」口から出てしまった。

「生活がか？それともあいつがか？」

「上手く言われへんけど、生活とか時チャンとかとは違うねん、傍にいて私の人生じゃなく、彼の人生を私は生きてる。傍にいて自分の人生を、生きたいそんな事思てしもてん。」

「そうか。」

その夜、2人で布団を並べて寝た。布団の中で誰かと話しているようだったが、私は寝入ってしまった。

バイトや好きなお稽古に通っているうちに、1週間はあつとゆうまに過ぎ、1ヶ月を意識を持たない様に過ごし、彼に連絡を取らずに

いた。本当はどれ位我慢出来るかやってみたかった。

朝、携帯が鳴り久しぶりの声がした。

「おはよう、１ヶ月過ぎても電話がないねんけど、毎日が楽しいか？」  
「チョツと機嫌が悪そう。」

「おはよう！朝、散歩に行ったから気分爽快。怒ってるんやったら切るわ。」

喧嘩をするつもりは無いけど、声を聞いてドキドキする自分と、私をほったらかしに出来る人に腹がたった。１ヶ月も電話をかけて来ないで、私をほったらかしにしておいて、掛けてきて、聞いた言葉が皮肉。

「ごめん。声聞いたら腹が立って、時間ある？」  
「腹が立つのは私のほうやって！」

「いっつも空けてるよ」  
「嘘ではない。頭の中では、いつも空けていた。」

「・・・ベランダで、昼ご飯食べよか。」  
「昼には早いと言いたかったが、ドキドキがやまない。」

「タクシーで行くから１０分で着くけど。用意手伝うわ。じゃね」  
電話を切って急いで家を出た。

部屋の表札に書かれた「野田秀時」懐かしい、鍵は持って来ていたがチャイムを鳴らした。久しぶりの彼は綺麗だが少し線が細く成った様に思え、髪は肩を過ぎていた。

「こんにちは、お邪魔します。」  
「わざと丁寧に言った。」

優しい笑顔で「いらっしやい、どうぞ」  
部屋へ入ると、いつもの彼の匂いがした。

甘いローションの匂い。

前を歩く彼の背中に体を付け「今度何ヶ月後かな？」  
「ため息混じりに言ってみた、」

「アホ！気が狂うわ。今度は許すけど、又こんな事したら一緒に暮らすで。」  
前に回した私の手を上から押さえて言った。嬉しいけど前と同じには成りたくない。

「エー、せっかく出たのに。」愛には包まれていたい。

「パスタ持って行って、ビールは後で持っていくから」てきぱきとして、白いセーターが似合っている

誰かに自慢できないのが残念。

ビールで眠たくなり、2人で昼寝をする。久しぶりに深い眠りにつけた。気が付くと夜9時を過ぎていてベッドは私一人、バイト先に休むことを伝え、しばらく目をつぶっていたら、雨の音が聞こえ、暖かいベッドで又眠った。夜中に目が覚めた時は、隣で彼が寝息をたてていたから、眠りにもすぐに入っていた。

コーヒーの匂いで目が覚め、隣の枕を見るとでこぼこしてて、幸せな眠りの時間を過ごした。

「起きた？」

「ウーン！」気持ちよくて、ベッドから出れない。

「何も食べないで寝てたから、お腹すいたやろ、何食べたい？」

「なにもいらへん、（貴方がいたら何もいらない）このベッドにずっと居たい」

「そやな、そうしたいな！コーヒーはいったよ」私の話に乗ってくる様子も無いので、

「シャワー浴びてくる。一緒にどう？」気分転換に言ってみた。

「先行つてて、後で行くから。」

「ウツソー。来るの？」でも私の中では、何を見られても良いと思っていた。

「入るぞ！」本間に来た。

「どうぞ、いいよ。」顔だけを見て気絶しそうになったが、両手を前に出して、バスタオルを広げ私の顔だけが見える様にして入って来た。自分の腰にもバスタオルを巻いて。

「なに？」気持ちを见られない様に精一杯の声を出した。

「体を拭いてやりたいけど、出て！」ニッコリ笑いながら言う事が出来る人間にムカつく。

彼が巻いてくれたタオルを、この前のシーツの時の様に取りたくない

ったが、ホットした気持ちと優しさが心地良く（きつと私今、幸せな顔をしているな）風呂場の戸を閉める時に「早く出てきてね？」  
つい新婚さんの言うような台詞を言ってしまった。

「おう！」戸の向こうで返事が返って来る、これもまた新婚さんだ。笑おうとしたが笑えない。

ベランダに出ると少しだが夕焼けが出ていた、「もうそろそろ帰らないといけない」と、私を急かせているようで、夕焼けのオレンジ色は、せつなく、ただただ切ない。

タクシーの窓を開けて、風の中を走っていると、黙って彼の部屋を出てきた切なさや、その他の色んな事が飛んで無くなり家に帰ったら、何も始まっていないゼロの状態に成っていて、彼の存在自体知らない生活を始められる様な、気がして夜道を走り家に帰った。

あれから、電話の代わりに、葉書が毎週1枚届くようになった。

簡単な時は「おはよう。今から仕事に行く」と書かれてあり、長いときでも葉書半分程で終わっている。

声が聞きたくなるのを無理やり用事を作って、外に出て我慢していたが、私も葉書を出すようにしたら、また違った安らぎが生まれ、会わなくても辛くなくなってきた。もう4ヶ月目に入っている。このままでいい。



## 愛し方 第2話 (ずーと、一緒)

喫茶店のかきいれどきの正月を、休み無しで働き自分達へのご褒美として、数人で新年会をする事になった。

正月も時ちゃんから新年の葉書が来ただけで電話は無く、一人になると声が聞きたくなるから、部屋中を雑巾を持って歩き回り、する事が無くなるとビールを飲んで寝るといふ、哀しいぐらい情けない日々を送っている。

自分の力で生きたいと思っていた、あのきらきらした物は何処へ行ったのか、今は新年会が待ちどろしい。

新年会は午後5時まで仕事をして、6時に居酒屋に集合して始まる事になっていた。

服を新年会用に女性軍は着替えて、髪や化粧も直して4人で行くと、もう男性軍は来ていた。

そこに居たのは男4人、隣に居たバイト仲間に「これって合コン？同じ店の人達としないよね」聞いてから、相手の返事も聞かないで自分で答えいる私は少し動揺している。

バイト仲間の安代さんは「これって合コンみたいやね！」と言ってはしゃいで店に入り、初めての私は何かドキドキして、それでいて何か後ろめたい様な気持ちで、席に着き暫らくすると、皆話し声が段々大きくなり、手振り身振りで話さないと解らなくなってきた。

私は緊張であまり食べれ無いでいると、中川さんが色々と気を使ってくれていたが、正直放って置いて欲しかった。

こんな事は初めてなので、皆から注目されたり、中川さんがする事で二人だけ浮いた感じになりたくなかったし、何時もより申し訳ないけど、愛想の無い態度をとってしまった。

2次会も両脇に吉田さんと中川さんがいた。

二人とも住んでいる所が同じ方面で、送っていくから3次会も一緒に行こうと誘われ、残り5人で3次会へ行く事になった。

普段は絶対行かないが、一人で帰るのが寂しかったのと、この二人は何時も、私を女としてではなく同僚として、仕事の事やプライベートな事も話してくれて、3人とも同士ののような連帯感をもっていた。

飲みながら「この状態を時チャンが見たら、怒るだろうな」そんな事を考え、見られたら何て答えようと空想しながら飲み、人の話にも適当に返事をしていたら、皆の声が遠くに聞こえ、吉田さんと中川さんに酔ったから帰ると言うと、自分達も帰ると言うので一緒に出た。

歩いているとだんだん眠くなり、足もだるくなつて来てしやがみ込んでしまった。

「ごめん、酔っ払った」二人に謝ると、中川さんが「吉田、俺が背負うから、靴持つて。タクシーが来たら拾て」

「かつこ悪いし、そんな、男の人におんぶなんか、してもらわれへん」

「ええから、はよ！俺達かて酔うてんねんから、いつ動けんようになるか判れへんねんから」

もう私も限界だったので甘える事にした。

「有難う、このお返し考えとくは」

ボウとした意識の中で、前に何人かの女の人が立っているのが目に入った。

その中の一人が誰か気が着き、あわてて背負われた肩に顔を隠して立ち去ってくれるのを祈った。本当にドラマの様に、中川さんが彼女の前で止まって、ずっと来た私を背負い直した。

「ちょっと、あなた、その子を知ってるんだけど何処へ連れて行くの？」時チャンだ。

寝たふりをして彼らに任せる事にした。

「この人を知ってるんですか？」吉田さんだ不機嫌な声で聞いた。

（良いから早く行こう。）

「私の隣に住んでいた人よ。だいぶ酔ってるわね、女の子をこんな

に成るまで飲ませて、何考えてんのよ」私の顔を覗き込んでる気配がしている。（あっちへ行つて。）

「吉田タクシーまだか、つかまれへんか？」（お願い、中川さん動いて。）

「彼女は私が車で送っていくは、男の人が送っていくより良いですよ。」

「それはそうですけど、知らない人に預けるわけには行きません」（中川さん頑張つて言つて。）

「その子の名前は、吉野 優、年齢23歳、アルバイトは5月からしているはずよ、これでどう？」

「解りました。じゃお願いします。念のため名刺を頂けますか」（中川さん、お願いなんかないで。）

「ちよつと待てて、アッそうだ、この子にはお世話になったから、この子に代わつてお礼をさせて」

（お礼は私がします、貴方はあっちへ行つて。）

「いえ、俺達はいいです」私をこの人達は置いていくんだ・・・

「私の店で飲んでいつて、もちろん御代はいりません。何でも飲んで、さあ行きましょう」

「おい、吉田どうする？」

「折角ですし、中川さんも重いでしよう、入りましょう」やっぱり置いていくんだ。

店に入ると、時チャンが店の人に「その子は私の部屋に寝かせて、二人にお酒をお出しして」と言っていたが、中川さんと吉田さんがソファに私を寝かせてくれた。

「さあ、店のほうへどうぞ」時チャンが二人を連れて行った。店に入つて、なぜか安心して自分の不思議。

酔いがまわつて目をつぶっていると、時チャンが入ってきて、毛布を掛けながら「久し振りに会えたら、その人は知らない男の背中の上。それも見せた事のない酔っ払った姿で、俺はどうしたらええんやろナ」

「ごめん。寂しかったから」目を閉じているのに涙が流れた。手で涙を拭いてくれながら「ご免はこっちの方や、家まで送るからゆっくり寝とき」

大好きな匂いと、横の人の気配で目が覚め、部屋の天井で何処かすぐに解った。

懐かしい寝顔、暖かいベッド、これで二人何も無いなんて、誰が信じるだろう。

誰も信じるはずが無い。

ベッドをそつと抜け出し、今のマンションとは話にならない位の大きな風呂場、酒の臭いを消す為に、香料の入った沐浴剤を多く入れて湯船につかり、浸かりながら何をどう言って帰ろうか考えていると「もう起きたん？風呂で寝たらあかんで」「うん、大丈夫」私の癖を良く知っている。

風呂から出ると新しい下着や洋服が置いてあった。

前だったら優しさに腹が立っていたが、今はこの優しさを離したくない。

「下着も洋服もぴったり、彼女の？」作ってくれたジュースを飲みながら聞く。

「そうや。俺の出で行った彼女のや！」笑いながら、ゲンコツで私の頭を押す。

「ナア・・・時ちゃん」

「うん？ 何？」CDを選んでいる彼に素直に言おうと思う、自分の気持ちを。

「心が寂しいて解る？」

「解るよ」ショパンのノクターンがかかった。

「一人で生活始めて私それが解った。私の愛情を渡せる人が居ない寂しさも」ショパンが私に言わせる。

ソファに居る私の側に座り、私を見ないで次の言葉を待っていた。

「ずーと側に居て、結婚して」申し込んだ。

「ずーと側に居る。でも結婚はでけへん」意味が解らない。

「家を出るときに親達に結婚する、子供も作るってゆうてたやん」  
私の方へ身体を向け「結婚ゆう事は、子供を作るような事をするゆう事やねんで」

「そんな事分かってる、すきやから愛しているから自然なことや」  
「・・・俺にはでけへん」・・・ああ、やっぱりそうだった。この人はそうだった。

自分はなんて酷な事をこの人に、この愛は叶えられないと解っていたのに。

不思議に涙が出ない、別の処が心が、大声で泣いている気が狂たように。

「ごめん、そうだったね。今の話は聞いていない事にして、ずーと死ぬまで」

「俺にはお前だけや。家を出るときはお前にすがって生きるしかなかった。でも今は俺の心の深いところまでお前や、人に触れて欲しくない闇の部分にもお前が居る」

「子供なんか作らなくても良い、いつか、もしかしたら、そうなるかも知れない。・・・結婚したらって、思ってしまっただけ」

「一生お前だけしかおらへん、結婚して、ずーと一緒にいたい。でもそれをしたらお前の女としての人生は無くなる。よく考えて。それと親にも優にも言っていない、背負っていかんなあかん重たい物が有るねん、お前だけがそれを聞く権利がある。言わなくて済めば良いと思っていたけど。聞く決心が付いたらゆうて」

「うん、そうする。頭の中が考えることが一杯有って弾けそう」

「そうか、弾けそうか」声を出して笑っているが辛いだろうな。

「いつも御免」優しく笑いながら抱きしめて。

「こうしてお前が居てくれるから」

「こうして時ちゃんが居てくれるから」二人は私次第で、ずーと一緒に居られると思った。

### 愛し方 第3話 (店)

夜、店に出ると、中川さんが直ぐに話し掛けてきた。

昨夜、大丈夫だったか聞いてきた。

「ひどい！ あの人に預けるなんて」オオバーに言うと、ビックリして、

「どうしたん！ 何かあったん！」

「夜中に、ご飯を作れって言うは、朝まで話に付き合わされるは、大変やってんから。寝不足よ、ホラ見て！」顔を上げて、目のところを指差した。

嘘ばかりついてやった。あのまま背負って、サッサと行ってくれたら、こんなに頭の中が弾けそうな事に成らなかったのに。

もしかして、時チャンは遠回しに「自分の事は諦める」って言うとのんやりか、

イヤ！そういう事では無かった。

そやけどなんで？

一緒に居たいから結婚したいと望んではいかんの？

子供は要らないって言っているのに。

闇の部分って何やる？

アア頭が痛い！ 二日酔いで痛いのか、考えすぎて痛いのか、分から無く成って来た。

其れから何日か経って、もう後1時間で、今週の仕事はお終いと言う時に、中川さんが私の側に来て、私と同じ様に、店のホールに向いて立ち並び、私の顔を見ないで、

「仕事終わってから、付き合っって欲しいねんけど」突然の言葉に横を見上げると、彼は無表情で前を見ていた。

サボって無駄話をしていると、誤解され無い様に無表情で、話しているんだと思い、私も前を向いて無表情で、「怖いですね」と言ってみた。

何か有ったのだろうか？

凄く気になって聞きたかったが、仕事中の為周りを気にしながら、

「何処で待ってたらいい？」前を向いたまま聞くと、

「店を出た東角、僕も8時で終わりやから」さっきの緊張した話し方とは違い、彼のいつもの話し方にもどっていた。

「分かりました。私だけですか？」ちよつと不安で聞いてみた。

「そう、吉田は今日は遅いから。でも知ってるから、後で来るかもしれないけど。それじゃ後で」

店の前からタクシーに乗り、中川さんは何も言わないので、私も黙って乗っていたが、走ってる方向でなんか嫌な予感がした。

中川さんは何か緊張している様で、その緊張が伝わって話が弾まず、タクシーは中川さんの言うとおりに走り、止った。

見事に予感的中して、時チャンの店の前に来ていた。

店には、時チャンに凄く叱られたけど、どんな店か見たくて1回来た事がある。正確に言くと、この前酔い潰れた時を入れると2回だが、この前のは記憶にほとんど無いので、1度来ただけと言う方が正しい。

前に来た時は昼間だったので、今見ているような、明るいガラス戸では無かった。

電飾が綺麗で、品が有り、ドアを開けると楽しいことがある様な、そんな店の玄関に成っていた。

中川さんがドアを開けようとしているが、ドアの向こうに時チャンの世界がある。

私を見たらきつと怒る、いやビックリして、怒って無視される。

やっと一緒にやって行こうと言う事に成ったのに。

この人に私達の事を話しても、理解出来ないだろうし。

強引に、少し開いたドアを両手で閉め、

「私帰ります。ここに入りたくないんです」パニックってるせいか敬語が出た。

「この前ここで、ただ酒飲んだから、そのお返しをせんと気がすま

へんねん。優ちゃんの知り合いやったら余計や、僕一人やったら、よう入らんから優ちゃんに来てもってんけど。頼むは、一緒に入って」

中川さんの影に隠れて入っていった。

入ると店の中を見ないで、ボーイさんと斜め下だけを見て席に着いた。

中川さんと向かい合わせに座り、横に元男だとはとても思えない、綺麗な女性が二人来てくれた。

飲み物を注文する時に、後頭部に痛い視線を感じ、後ろを振り向かなくても時チャンと分かっていた。

目に見えない時チャン光線は、怒っていた。

私はもう開き直って堂々と遊んでやれと思い、ウィスキーをロックで飲み、私の左に座っている女性と話も弾み出し、その頃になると時チャン光線も感じ無くなり、店も忙しくなってきた様だった。

私と話している人は、名前を「水城<sup>ミズキ</sup>」と言うそうだが、そのミズキさんの頬つぺたと下唇がふつくらしていて、触ってみたくなくて「ちよつと、触ってみてもいい？」と聞いてみた。

中川さんは驚いていたが、「女の人やからいいよ、はい！どうぞ」とミズキさんは、胸を突き出してきた。

「ごめんなさい。胸と違うのよ」笑いながら言うと、

中川さんとミズキさんの声で「エー、違うの？」

ミズキさんの声が完全に男の声に成っていたので、又、笑ってしまい、もう一度お願いをして頬つぺたと唇に触れる事になった。

頬と唇をそつと触っていると、

「何してんの？」吉田さんが来た。

事情を話すと「僕のも触ってみて」と言いながら、私の横に座ると私の飲んでいたグラスを空け、

みずきさん達に「この前は有難う御座いました」とお礼を言っていた。

一番私がお世話になったのに、まだお礼も言っていなかった。



言おうとしたその時、ミズキさん達が「ちょっと、失礼します」と言って、会釈をして席を立って行った。

他の席でも、店の人達が席を離れて行きだした。

きつと、シヨウが始まる。不安で逃げ出したくなる気持ちを抑えて、迷子になった子供の様に、店の中を見回し、時チャンを探した。

カウンターの傍で、私を見ている時チャンの目に会い、そつと席を立ち、向かった。

時チャンは、何も言わず鍵だけを私に渡してホールへ行った。

店の時チャンの部屋けん事務所に入ると、店からダンス音楽が聞こえて来た。

テーブルの上にお弁当が有り、その上に紙が貼ってあった。

「優へ、お茶が入っています、お前が飲む頃、猫舌のお前に飲み易くなっていると思う。しっかり食べる！」私が、食べていないのを知っていて、用意をしてくれた、そして、この部屋に私が何時来るのか分かっている時チャンに、それと、時チャンの女の部分を認めたくなくて、私がシヨウを見れ無い事を知っている時チャンに、感謝と刹那さで、涙が落ち、また落ちる。

お弁当を口の中へ押し込んで、お茶で、流し込む事をしていると、ステージ衣装のタキシード姿でミズキさんが入ってきた、

「あつ、御免なさい。手袋を取りに来たら電気が点いて・・・いたので・気になって、大丈夫？」

横に座り私を見て、そつと「可愛そうに・・・」と低い声で言い、私がどんな気持ちで今居るのか、この人は何となく分かっている。止まっていた涙が溢れ出して来て、止め様と手で拭いても流れ出てくる。

「止まるお呪いをして上げようか？」又、優しい声で言た。するとミズキさんの顔が段々近づいてくる。

これってと言う事？エッ！もう直ぐ鼻と鼻が引っ付くけど、これ御呪い？

頭の中が真っ白に成った時に、「ミズキ！」鋭い声がした。時チャ

ンじゃないみたいな声が。

ミズキさんは、ニコツと笑うと顔を離し「じゃーね」と言っ出て行った。

ミズキさんと同じタキシードで宝塚のスターの様な時チャンが立っていた。

これって、女装？、男装？ 考え始めたたん。

「一人で居るんやから、鍵せんとあかんやろ！」怒っている。

アツ！そや、今何やったんやろう？

「時チャン今の何？何やったん？ やっぱり御呪い？」

「何やったて？お前に、チュ・しようと、しとつたんやろ！」

「エー？ エッ御呪い違うの？」

「アホ！・・・御呪いて何や？」

「さあ、知らん」泣いてたなんて言われへん。

「そやけど、ミズキさんがそんな事するとは、思われへんは」女に成ってるのに。

「もうええわ、帰ろう！」私の為に仕事を早く終えるのだろうか。

「時チャン、私だったら中川さん達と帰るから良いよ」 ウッワー、後姿でも怒ってるのが分かる。

「さつきみたいな、能天気な事が有って、ええか、ようく聞いて下さいよ。私が、余り良く知らない、それも酔っている男二人と一緒に、貴方様を帰すわけには行かないでしょう。如何ですか、分かりましたでしょうか」

怖い時チャンをちょっと、いじくって見たくなり、泣かされてる仕返しをする様な気持ちで、

「時チャン気が付いてないと思うけど、スゴーイ、変な敬語に成ってるよ」

言っやりました。

振り向いて「なあ、俺の部屋・ 今・ 凄い・ 汚いねん、お前の部屋に今日泊まるで。ええやろ！さあ、帰ろ！」と言われてしまいました。

私は負けても嬉しいです。

店に居る二人に挨拶をしに行くと、中川さんはすっかり鼻の下が伸びて上機嫌、吉田さんは酔っ払って、私と一緒に帰ると行って、きかないのを、時チャンが引き離して、それでやっと私と時チャンは、店を出る事が出来ました。

吉田さんを引き離すとき、傍に居たミズキさんの足を時チャンがほんの一瞬ですが、ミズキさんの顔を見ながら、蹴るのを見てしまいました。

私の知らない時チャンを、幾つか見てしまい、店に行く事がもう無いように願いたです。

「時チャンたら、チュ・やて・」車の中で、冷かしながら笑い転げていた。

始めは笑っている私を無視して、運転をしていたが、

「もう、ええって！」と言いながらニヤニヤしている。その顔は大きな立派な大人だ。

## 愛し方 第4話（桜の花）

何かに起こされた様に、朝5時に目が覚めた。

しばらくベッドの中でボーとして居ると、部屋の中は薄暗いのになに故か、

ワクワクする事が起こりそうな、そんな不思議な気がしてきた。

お湯を沸かしながら、ベランダのカーテンを開けると、

外は春の雨が降っていた。

雨やのに・・・、ワクワクするのは何で？

暖かい朝やから？

早く目が覚めたせい？

ベランダのガラス戸の傍に、イスとコーヒーを持ってきて、  
時ちゃんの、この前言った事を考えながら、雨を見ていた。

雨が細かい雨に変わり、辺りも少し明るくなって来たようで、  
時計を見ると時間は7時になっていた。

朝の気持ちを確かめたくて、外に出てみることにした。

私が気に入って買った、男物のパーミント色の大きな傘と、  
オレンジのレインコートを着て、今朝のワクワクする気持ちを持つ  
て、

期待一杯に部屋を出た。

小1時間程歩いて、公園で大きな桜を発見した時は、

雨はもうやんで日が射していた。

「ウワァー！」と、声にならない溜息のようなものが、体の中から  
出た。

自然に感謝！

公園中の桜を観て周った後、あの人にこの公園の桜を、  
プレゼントしようと思い立ち、ずっと雀が桜の花を突つつき、  
花の茎の所から切り落としたのが、木の下を薄っすらと白くしてい  
た。

その桜の花を、レインコートのポケット2つと、頭に被る大きな三角の所と、傘を少し開けた所に、それぞれ一杯に入れて潰さない様に、

そつとタクシーに乗った。

こういう時にいつも思う、すぐに、そつと行ける、

ドラえものの（どこでもドア）が有ったらと、

幼稚かも知れないけど本当にいつも思う。

ときどきしながら、鍵をゆっくり開け、いつもの様にチェーンを、

掛けていない事を、願いながらドアを開けてみた、

ドアはゆっくりと開いた。

遮光カーテンのせいで、部屋に入って直ぐは何も見えなかったが、だんだん目も慣れてきたので、入り口で桜の花を全部だし、

レインコートも音がするので脱ぎ、奥の床から撒いていった、

最後にベッドと、枕の横にも撒いたが、深い眠りにしているのか、時ちゃんの上を向いて静かに眠っていた。

湯船に、私を買って置いた桜色の沐浴材を、洗面所から出して入れ、湯張りとお湯をして、湯船の周りに少し桜の花を置いた。

手紙を書きたかったが、音をたてて起こしたら、

このに『企画』が飛んでしまうので止めた。

帰りはタクシーに乗らず、弾む心を楽しみながら、

一時間程の距離を歩いて帰った。

きつと起きるのは、昼近くだろうとは分かっているが、落ち着かず家の掃除をして紛らわせ、携帯が成るのを、数分おき、数十分おきに、時間を見ながら待っていた。

12時を過ぎたら、段々落ち着いてきて、喜んで貰えたらそれで良い、

自分も楽しんだし、電話は付録のお楽しみと思う事にした。

絵の課題を出して描いていると、気が散るところか乗って来た。

気が付くと3時をまわっており、コーヒを一口飲んだときに携帯がなり、

又偶然にも玄関のチャイムも鳴った。

まず携帯に出ると時チャンで、

「電話と玄関のチャイム、両方鳴ってん。ちょっと待って」

携帯を持ったまま、玄関のチャイムに出ると、

「同僚の吉田です」ビックリした。でも、同僚は入らんと思うんだけど、

「時チャン、ちょっと待ってね」と言いながらドアを開けた。

携帯から「優、何のようか聞いてから開けなあかんで！」

「残念！もう開けてしもた」

吉田さんが気持ち悪いぐらい、愛想のいい笑顔をして立っていた。

「吉田さん、どうしたん？」私も釣られて、いい笑顔で聞いた。

「ああ、電話中やったん、御免。待ってるから、どうぞ」笑顔で言った。

携帯の向こうでは、「早く、用件を聞き」時チャンの声がしていた。私も早く桜の花の反応を、時チャンに聞きたかったから、

吉田さんには早く用件を言って、帰って欲しかった。

「かまへんよ、ゆうて何？」携帯の向うでも黙って聞こうとしていた。

「いや、電話から先にどうぞ」私の顔から笑顔が一瞬消えた。

「時チャン、先に言って」本間にこの吉田！。

「吉田さんって、この前店でお前に絡み付いて、離れなかった奴やろ？」

「そこまでは、してなかったと思うけど」ちょっと違うと思うけど。

「氣い付けや！今からそっちへ行くわ、この前二人に教えて貰ったから」

そうだ時チャンは、私を送る積もりで、家を聞いて知っていたんだ。

「大丈夫よ！」吉田さんの顔を見ながら笑顔でいった。

「・・・分かった。桜ありがとう、すっごい嬉しかった。

会いたいねんけど桜の下で、そこで夕ご飯せえへんか？」

本当にこの人は、私がして欲しい事を先に言ってくれる。

「夕方ね、何時にする？」と聞いた時、

「今日の夕方はあかん！」突然、吉田さんが話に入ってきた。

「時チャンって、あの、お店のママさんやろ、ちよっと貸して」と言って携帯を取った。

「こんにちは、吉田です。今日お店の方へ行こうと思って、優ちゃんを誘いに来たんです。僕一人ではチョツと入りにくいので、すいません。でも、優ちゃんと夕方会ったら、僕も是非入れてください。お願いします」

何を言うのこの人は！馬に蹴られて死んじまえ！

「吉田さん、何とかに蹴られて死んじまえて言う言葉しらん？」時チャンの笑い声が聞こえてる。

「え？」本当に知らない顔をしていた。

携帯を取り上げて、時チャンが断るのを期待しながら、

「と、言うのが用件みたいです、ごめんね！」

御免の言葉に色々乗せて言った。

「タご飯は、又今度という事にしようか、ご飯は二人で食べたいな」そうだ、他の人に気を使わずにゆっくり食べたい。

「うん。吉田さんは夜8時ごろ店に連れて行くわ」

私はバイトがあるし、店の中に入っても座らないで、

帰るつもりで言った。電話を切り、吉田さんに言おうとしたら、

「夕方の約束無しになったん？」心配そうに聞いてきた。

「バイトも有るから、時間が合わなかったから、大丈夫気にせんどいて」

本当は十分気にして、落ち込んで欲しいけど、これも運命。

「申し訳ないから、晩飯、僕がおごるわ」

何時あんだと、晩御飯の約束した？

「有難う、用意があるから30分程、時間潰して来てくれる？」もう絶対おごって貰う。

「ほな、喫茶店でも行つてつぶして来るわ」

ニツコリ笑って、行った。

ご飯を食べて時チャンの店に着くと、ちょうど8時だった。途中どうしてか、吉田さんはチョコレート<sup>チョコレート</sup>の詰め合わせを買う。

店に入ると直ぐに時チャンが、来てくれた。本当に綺麗だ。

吉田さんは、買ったチョコレートを渡して、何故かニヤケていたが、吉田さんを席に案内して行く、時チャンに背を向けて、店を出た。

きっと、時チャンは私が店に居なくても、すべて分っているだろう。次の日バイトに行くと、吉田さんと中川さんが側に来て、

「昨日飲み過ぎて、ママさんの家に泊めてもらてん」何を言っているの？

「おまえナ！」と中川さんが言う、私も言いたかった。

「違うよ！変に誤解せんどいて、違うて。」私はその言葉にムカツイタ。

何であんたなんかと、アホ！

「声がして目を覚ましたら、男の人が居て、それがママやってんけどナ」

私を見ながら嬉しそうに話している、

「それで、お前どこで寝たんや」そうや！どこで寝たんよ。

「もちろんベッドや」シヨックだ。

「お前大丈夫やったか？」中川さん、どういう意味で聞いているの？

「何をですか？ 僕は彼女に指一本触れてませんよ！」二人の話に腹が立つ。

「それで、時チャンはどこで寝たの？」私はシヨックを受けていた。

「僕と一緒に寝たんと違うかな」おっとり、ニツコリ笑いながら言った。

お腹の底から腹が立ち、背中や首の後が熱くなって、汗がでてきた。「それより、ビックリしたわ」何よ、こっちがビックリするわ。

「部屋の床一面、サクラの花だらけで、歩く時にふまんように気い付けて、

歩くように言われてんけど、下見たら丸く足跡みたいに隙間が付け



てあつたわ」

「何か、あの人に合いそうやな、でも、男には合わんで」風情の無い奴や。

「でもね、中川さん男のママさんも、カッコよかったですよ、ナア優ちゃん」

「カッコいいと思うよ」感情を出さない様に言うと、

「ほんで、僕がこのサクラどうしたんです、って聞いたらプレゼントやて、

朝起きたら床一面桜やってんで、凄いやろ。僕も欲しいわ」

「そんな恋人はよ作れ！でも、あの人の恋人て男？女？どっちか聞いたか？」

二人の会話を、興味無さそうに聞いていたが、これにはドキツとした。

「聞いたけどニツコリするだけで、答えてくれへんかった」

「優ちゃん知らへんのか？」中川さんが聞いてきた。

「さあ、知りませんが」愛想無い様に答えて、何気なく吉田さんを見ると、

私を見てニツコリと優しく微笑んでいた、このニツコリは何やる。

「吉田さんだけ、店に置いて先に帰ってすいませんでした。」と謝ると、

「こつちこそ、もう此れからは、一人でも行ける様になったから、有難う」

エッ！という風になったんやろ、時チャンと仲良くなったと言うことかな、

もしそうやったら、私達の中に入って来られたようで、凄く不愉快でムカツク。

何かバイトしてる時でも、イライラして吉田さんに、何時もはする仕事を、

気がつかない不利をして、吉田さんにやらせた。

家に帰っても落ち着かなくて、だんだん時チャンに腹が立って来て、

部屋の桜を取りに行くことにした。

部屋の電気をつけると、本当に足跡のように丸く空いていた。時チャンの歩く歩幅に、動く方向に空いていた。

彼の歩幅の通り足に乗せて歩き、間接照明のスイッチを入れてみた、部屋が幻想的で、桜の花が浮き上がり、その美しさに動けなかった。このまま帰りたくなくて、部屋に来ただけを伝えすぐに帰るつもりで、

携帯に電話を入れてみた、仕事中だから出ないだろうと思っていたら、

直ぐに出てくれて、用件を話すと直ぐ帰ると言う、私は待たない積もりで、

部屋の中の幻想的な美しさを、もう1度見たくてソファに座っていると、

突然鍵が開く音がして、桜の花の上を歩いて彼が帰ってきました。

「ただいま」走ったようです。

「おかえり、早かったね」私も桜の花の上を歩いていきました。

## 愛し方 第5話（知らない恋）

前回までのあらすじ

親同士が仲が良く、お互いの家を行き来して育った二人。

優（吉野 優）23歳、時ちゃん（野田 秀時）26歳。

優、時ちゃんと呼び合い、秀時がゲイバーで働く時に、親の反対を押して優は秀時の隣の部屋で暮らし始めた。

暮らしていく中に、自分で生活をしなくなり引越す。

その生活も慣れてきた時、バイト先の人からショキングな話を聞いた、二人の場所であった秀時の部屋に、二人以外の人間を秀時が入れたと言う事を聞き、秀時の部屋へ行く。

私が携帯を入れた時、時ちゃんは丁度マンションの傍に居て、携帯を切ると走って帰ってきた。  
走る音が部屋の中まで聞こえた。

鍵を開け苦しそうに息をする、時ちゃんスマイルの彼、桜の花の上を歩きながら、彼の笑顔に近づいて、

「早かったけど、体の調子でも悪いの？」顔をほころばせて聞いた。  
私の言葉にビックリして、ニヤと笑うと呆れたと言う風に部屋に入り、

「あほ、今何時やおもてんの？」自分の時計を外しながら私に見せた。

時計の計は午前2時で、私の3千円の時計は午後11時で止まっていた。

「あつ！電池が切れたんや。新しいの買わんとあかんわ」

時計をしている私の腕を持って、

「時計屋へ行って電池換えてもらったら、まだ使えるやん」  
勿体無いと言いたげに言うと、私の腕を離した。

「お言葉ですが、この時計の電池を変えるお金で新しいのが買えるのよ。」

使い捨てをご存知？ 世間知らず・・・」反撃を期待したが、なかった。

顔を上げると子供を見るような目で私を見て笑っていた。

こういう時は嬉しくなるのだが、恥ずかしくて目を反らしてしまう。

「時チャン、桜かたずけるね」二人でソファに掛けながら言うと、

「お前に踏まれた桜は可愛そうやな、踏まれて蹴散らされてる」

確かに、あっち、こっちに飛んでいた。玄関近くのは、そのままだ。

「それにしても、部屋の中ええ雰囲気やね」琥珀色の灯りに桜の色。

「うん」彼は桜の上を優しく歩き、グラスに入ったビールをくれた、

私が、「ハイ！お疲れ様でした」と、グラスを合わせ一気に空けると、

「お腹空いてたのか？」と聞いてきた、お腹？「喉が乾いてたのか」やろ？

彼のグラスを見ると、ビールはイッパイあった。

「ビールは一気にグーと行かんと、それ飲まないの？」

彼のを飲み干した頃に、腹が立つことがあったのを思い出した。

部屋の雰囲気は最高に良く、感情のままに言葉を出したく無くて、

ゆっくり彼の肩に頭を倒し、小さい声で、

「昨日、吉田さんが泊まったて？」怒りを抑えて聞いてみた。

「うん、泊まったよ、酔っ払って住所も言えなかったし」

私の肩を抱きながら、何も気にしていない様子だ。

「ベッドで寝たんやね、二人。もう・・・私だけの場所はないんやね」

やっと気がついた様で、座り直し私のほうを見て、

「気が付かなかった、ごめん。」

「あのベッドに、二人で居るのが好きだった。」ゆっくり私は言った。

「シーツとか布団を変えるとかの問題じゃないよな？」

確認をする様に私に聞いて来た。

「この部屋は、私と時ちゃんの部屋で、この部屋で二人でいる時が心の時間で外の時間は存在せえへん。部屋を出て外の世界に一人でいる時はただの生活の時間。そう思ってたんやけど」

時ちゃんは、「分かってるつもりでいたけど、でもな」

そう言っと、ため息をついてソファの後ろにもたれた。

「時ちゃんのした事は正しい。でも私には辛いことや、この部屋にはもう

二人だけの時間は存在せえへん、三人の時間が出来て私の場所は無くなってしもつた」

前の私だったら、泣きながら言っていただろうが、今は泣かずに言っている。

「ごめん。どうしたらええ？この前みたいにお前と離れる事は出来へんで。あかんで」

両手を頭に乗せて強い目で私に言ってきた。

「私の居場所を作って」私自身解らない。

私の肩を倒して彼が膝枕を私にしてくれ、私の髪や肩を撫ぜながら無言が続いた。

「新しいマンションを見つけろわ、そこで一緒に住も」凄い答えが出た。

「そんな簡単なん」私は違うと思う。それにもう少し今の生活を続けたい。

「お前は今の生活をもう少し続けたいと思ってるやろけど、俺は一緒に居たい」

でも、結婚は出来ないっていうんやろな。

「一生、話さんで済むんやったら、そうしたかったけど・・・優ともう一人の為に」

もう一人？この前言っていた告白の様な事かな、不安が広がり起きれなかった。

話を聞くと時ちゃんと離れてしまう事になる様な気がして。

「どうしても聞かなあかんこと？」

「怖いかな？ 優やから、言わんとあかんねん。お前が俺の人生やから分らないが涙が出て止まらない。」

膝が濡れて彼に分つてしまわないように袖で拭いた。

部屋の薄暗さが余計に話の深刻さを増すように思えた。

「どう話したらええのか、ずっと考えていたけど在った事を言うわな。」

高三の時付き合ってた人がいた。優にも迷惑を掛けた吉川茜や、髪長い優しい子で、優にあんな事をする様な子とは本当は違うねんで、

ジョークが通じて、付き合ってくれて言われた時は、嬉しかった。

大学に入ってから毎日のように会って。

深い付き合いをする様になって……

男女の仲になってから、どんどん俺にはまってくるのが分かってきだした。

少し怖いような気もしたけど……

独占欲のようなものが働いて気持ちよかったのも確かや……

彼女は俺の意見で動くようになって、自分で考えなくなった。

俺だけの為に生きてるように……

彼女の人生に責任をもたなあかんと思ひ出したところに、

ある光景を見てしまった。

本間に見てしまったと言う感じやった……

私の心は嫉妬ではちきれそうで、時ちゃんの私の肩に置かれた手の感触

で何とか平静さを保っていた。

「制服姿の高校生の男女が楽しそうに、肩を並べて商店街を歩いてて女の子のカバンを男の子が持つて、女の子は買い物袋を抱き抱えていて。周りの人が見えへん様な感じで笑い会ってた。」

シヨックやった……

自分が汚く思えて横にいる彼女の手を取って逃げた。

次にその高校生の二人

を見たときには向かい合って喫茶店にいた。

学生服は着てへんかったけど、すぐに二人やと通りの向こう側にいても

分かった・・・

男の子が女の子の髪に触るのを見た時は自分のした事を後悔して、自分自身に腹が立って、部屋の物をメチャクチャにした。

親はビックリして何があったのか聞くし、言えないし、苦しかった。そんな俺の様子を見て、聞いてきたから・・・

自分の感情をぶつける様に相手の事も考えずに馬鹿正直に話した。彼女にある女性をダブらせていた事。

いつの間にか吉川茜が俺の頭の中では、他の女性に変わってた・・・それが誰かも話した。気が付かないでその人を愛していた事・・・何度も誤って許して欲しい言うて、別れ話をしたんやけど、彼女に取っ

ては急な言いがかりみたいなきもちやったんやろな、何度も会って話してんけど分かってもらえへんかった。

理不尽な話やもんな・・・

暫くしたら彼女から連絡が無くなり、ホツとしたけど、気になって家に行ったら、親は俺と一緒に思ってた何日も連絡が無いので、帰ってきたら早く結婚する様に言う積もりで居たそうや・・・

彼女の置手紙にもそれらしい事が書いてあったし、そや無いことが分かって大騒ぎになって、やっと居所が分かって迎えに

行ったら男の人と暮らしていた。

付いたその日に知り合った人で仕事もしてなくて彼女が働いて生活をし

ているということやった。

一度家に帰ろうと頼んだけどあかんかった。

自分はこれからどんどん落ちていく、これは俺への復讐やそうでも

せん

と生きて行かれへんそう言われて。

彼女の家の人は、俺に申し訳ないて言うし、そんなん反対やのに。俺の平常心はイッパイイッパイやった。

影に隠れてある人をこっそり見ることで、何とか正常でおれた。

あのころは本間にしんどかったな……

暫くして落ち着いた頃に俺自身に変化が起きた、女性が集まって居る所へ行くと気分が悪くなって吐き気がするようになったり……

心が緊張してそこにおられへん様になったりして……

今はそんな事は無いけど。

その頃から女性より男性と居る方が落ち着くようになった。

そんな時や、死のうと思ったんは……

愛する人に、自分が起こした事とはいえ、愛も告げられず、愛することも出来ず、一生傍に居ることも出来ない……

一人の女性の人生も変えてしまつて、その償いも出来ない。

死んでしまえば楽やるなつて、それで海に車で飛びこんでんけどな。自分は正常やと思つてたけど狂つてたんやるな……

俺はどこまでアホなんやるな……

長い音の無い静かな時が過ぎた。

私から声を出した。「時ちゃん、女子高校生つて私の事？」もしかして。

「うん、そうや」当然という様に答えた。

「じゃ、ある人つて誰？その人とはどうしたん？」

涙声で聞いた。神様助けて！

「……今、俺の膝枕で泣いている。……一生こうしていたいな」ここにいたらあかん、帰ろう。

「時ちゃん、帰る」私の心の中は、神に対する失望感で一杯。

愛を打ち明けられても、混乱した頭では受け入れられない。

「うん、送るは、ええやる？」優しい声で言ってくれた。

時ちゃん、私は汚い。



ソファから立ち上がって、座っている彼に、

「時ちゃん、凄い事があつたんやね、・・・ありがとう、今も私の傍に居てくれて。・・・これが今感じている事で・・・時ちゃんギューとして」

立ち上がって、大きな腕で私を包み込んで、ギューと力を入れ抱いてくれた。

その時急に吐き気がして「気持ち悪い・・・はきそう」そう言って、トイレへ駆け込み吐いていると、外で「どうしたん、大丈夫か？」オロオロした時チャンの声が聞こえ、急いで出た。

「どうや？大丈夫か？病院行こう」貴方はどこまでも優しい、絶対に他の人に渡したくない。その為だったら嘘も立派についてみせる。洗面所で口をゆすいでいると、玄関のチャイムが鳴った。

時ちゃんが濡れたタオルを私に渡して、インターホンに出ると

「吉田くんや、朝から何やろ」そう言うのと玄関へ行った。

私も洗面所を出ると、玄関に吉田さんが居て私を見ると、ビックリした顔をして「ごめん、お邪魔した？」冷やかすように言い、

時ちゃんが「うーん、今はチョツと・・・」と言うと、私は急いで「うっん、今帰るところ、どうぞ」そう言ったとたん、又吐き気がして、

トイレへ飛び込んだ、ドアの向こうでは、

「どうしたんやろ、さっきからはいてるねん」困った様な時チャンの声。

「あつ！妊娠か？・・・そんなはず無いはな」吉田のアホの声がした。

笑ってしまうわ、アホやな。そう思った次の瞬間、そうだ妊娠だったら

すべての事が一気に解決するかもしれない。

時ちゃん以外の人と妊娠すればいいんだ。

私は時ちゃんの傍に一生居られればいい。其れだけが願いや。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2617a/>

---

愛し方

2010年10月20日13時37分発行